

## タイのサル問題

奥村 忠誠 (WMO)

今年の3月にタイでサルを観察する機会を得た。タイにはニホンザルと同じマカク属に分類されるベニガオザル、カニクイザル、ミナミブタオザルや、テナガザル属に分類されるシロテテナガザル等が複数生息しており、生息種数は15種ともいわれている。ニホンザルしか生息していない日本からするととても想像ができない。タイの森林面積は2010年時点で18,972千haであり、国土に占める割合は37%である。一方日本の森林面積は24,979千haであり、森林率は69%とされている。生息地の面積を想像しても、狭い地域に複数種が生息していることがわかる。それらの多くの種はタイの森林地域に生息しているが、市街地周辺に生息しているような種もあり、そのような場所では日本と同じようにサルと人間の軋轢が起こっている。今回はバンコク南部のペッチャブリー県において、そのような環境に生息しているカニクイザルとベニガオザルを観察できた。

カニクイザルを観察するためまずは Khao Yoi という町に向かった。ここは岩山を中心にその周辺に商店や小学校、警察署があるような場所であった。現地に着いた時にはカニクイザルが商店の屋根の上や電線に登っていた。道路には今年生まれのような子ザルが轢かれているが、誰も気にしていない。屋根に上っているサルに対しても特に追い払うことはしていないが、店にはパチンコが準備されていたので、商品に手を付けるようだと言われているかもしれない。ニホンザルに比べて人との位置的距離や関係性が近いと感じる。サルが移動した先の小学校ではサルに対して学童が BB

弾を撃っていた。執拗に追いかけるようなことは特にしない。道路わきにいるサルたちも私が近づいてもそれほど逃げるそぶりはない。



写真1 商店前の車の上で休むアカゲザル



写真2 公園のブランコでまどろむアカゲザルの親子

その後、寺院を二カ所回った。一カ所目はワットマハー サマナーラーム ラーチャ ウォラウィハーン。ここもサルが寺院の敷地内にいる。バナナを持った年配の女性がやってきて、サルにバナナを与える。タイではこれが普通らしい。木にはマンゴーがなっているがまだ時期が早いようだ。



写真3 地域の人が手渡しでバナナをあげている



写真5 寺院の日陰で休むアカゲザルたち



写真4 もらったバナナを食べるアカゲザル



写真6 犬との距離はとても近い

二カ所目のワットカオタキアップに移動する。海岸の縁にある小さな緑地の中にある寺院である。ここは欧米人の観光客に人気の場所らしい。サルは寺院周辺とそこまでの道によく出没するらしい。ここでも岩山を中心にサルが生息している。寺院ではサルたちはのんびり過ごしており、犬との距離も近い。人が利用するトイレや家がフェンスで囲まれ、サルが入らないようにされているのが特徴的だった。お土産屋で売っている食べ物をサルが持って行くということで、少しその周辺で様子を見ることにした。お土産屋の屋根に上り様子をうかがっている。店では魚介類が売られており、店から持っていくタイミングをうかがっているようだ。



写真7 サルが公衆トイレに入らないように柵で囲われている



写真8 土産物店の屋根の上で店のものを奪うタイミングをうかがっている

翌日にベニガオザルの生息地を訪れた。ここはベニガオザルの保護区になっている。現在この周辺には5群が生息しているとのこと。群れ間の距離が非常に近く、岩場を背後に持つ寺院を中心に生息している。私が行った時には寺院の建物で直射日光を避けるように休んでいる群れがいた。また、保護区では住民による餌付けが不定期に行われている。私がいる間にもバイクのサイドカーにいっぱい積まれたバナナやパパイヤ等を撒きに来ていた。多くのサルがそれを食べ、一つの群れが概ね食べ終わると隣で待っていた次の群れが食べるという状況。繁殖率がとても高くなっているようだ。



写真9 寺院の日陰で休むベニガオザル

この保護区のすぐそばにはキャッサバ畑があり、最近ベニガオザルにより芋を掘り返されるという被害が多くなってきているようだ。この場所でベニガオザルの研究をしている日本人研究者がコーディネートしてくれて、キャッサバ畑の管理者とタイの野生保護局の職員と一緒に畑を回る機会を得た。

ここは近年森林から農地に転換した土地らしい。森林で持っている土地には税金がかけられるという政策ができたようで、農地に変えるところが多いようである。キャッサバ畑の周辺長は約1km程度あり、その周囲をインターネットで購入した電気柵を農家の人が自ら設置しているとのことであった。柵の下段は金網で、上段は5段～8段の



写真11 子供のベニガオザルは色が白い



写真10 ベニガオザルもサルを警戒することはない



写真12 地域の人がバイクで大量のバナナを撒き、それに群がるベニガオザルの群れ

電気柵となっていた。電圧がとても弱く私が触ってもほとんど感じないくらいだった。話を聞いたところ、農家の人はサルを殺したくないので電圧をとても弱くしているとのことであった。しかしとてもサルが恐れるような柵にはなっていないので、電気の効果は現在のところほとんどないといえる。また、未完成とのことではあったが、出入りができる場所や金網の下が開いている場所、電気柵が電柱や木に隣接し上っては入れる場所等があり、改善点は多く見られた。しかし、タイの国民性や宗教の要素もあり、農地の縁にある作物は食べられてもいいと思っているところもありそうだ。しかし、先ほどの餌付け場所とこの農地との距離はほとんどないため、餌付けによる餌がもら

えない時には、すぐ横にあるこのキャッサバ畑に出てくる可能性は高そうだ。それでいてサルを殺したくないというから、この場所でのサル管理はとても難しい。対策の前に餌付けをすると何が起るのかを理解してもらう必要がある。

タイのこういった現状をみると、30年前の日本と同じようなことが起こっているように思えた。タイの文化や地域の人たちの生活は日本のそれとは全く異なるが、野生動物による被害を防ぐ方法や日本でどんな試行錯誤が行われてきたのかを知ることは、タイの人たちのヒントになるのかもしれない。



写真 13 農家の人、環境省の人と被害農地を視察



写真 14 電気柵の周りを見て回る